

# 第9回 南あわじ市まち・ひと・しごと創生総合戦略検証委員会 議事要旨

◆日時 令和元年8月21日（水）午後2時00分～午後4時15分

◆会場 南あわじ市中央公民館 視聴覚室

◆出席者 委員：6名

松坂委員（委員長）、碓委員（副委員長）

伊吹委員、金沢委員、鈴木委員、谷池委員

事務局：4名

総務企画部付部長、ふるさと創生課長及びふるさと創生課担当2名

傍聴者：1名

## ◆会議の概要

1. 開 会 委員長及び事務局から開会の言葉

2. 協議事項

協議① 地方創生交付金を充当した事業の評価検証について

○ 事務局より協議①について、内容説明等を行った。

### 【委員の主な質問・意見・評価】

#### 協議①について

#### 未来の担い手確保・育成総合支援事業

・委員：農業研修生の実績はどうなっているか。また、事業としては、研修生を増やすというよりは仕組みづくりを目指しているのか。

⇒事務局：親方の元に入っている農業研修生の実績は把握していないが、地域になかった仕組みづくりを構築して、新規就農者を増やしていきたいという考え。  
平成30年度の新規就農者の内、45歳未満の就農者が29人で、45歳未満の雇用就農者は9人となっている。総数でいうと雇用就農者は10人となっている。

・委員：親方利用した方が就農しやすいのか、農業研修生を対象とした方が就農しやすいのか。加速化させる方法はどこにあるのか。

⇒事務局：親方の元でノウハウを積んでいただくことで、農業で続けていくベースができると考えている。

・委員：平成30年度に実績が下がっており、厳しい状況ではないかもしれない。

・委員：個人の親方農家が高齢化している。受け入れ側の問題もあるかもしれない。

⇒事務局：吉備国際大学の就農希望者はどの程度あるか。

・委員：卒業生のうち、自分自身で農業をやっていく人は1人か2人。淡路島で残って

いくかという、それは非常に少ない。実家に帰って就農するなどといった就農者自体はいる。

⇒事務局：農業の支援をしているが、島全体で担い手が足りない中で、吉備国際大学が農学部というだけで、農業支援という必然性はないと考える。学生にとって、地元企業とどれだけ接点があるのかが大切で、市としては、島内で残ってもらう選択肢を広げることが重要。

⇒事務局：元々は就職支援を考えていた事業であり、今は農業に特化した形となっている。今後の事業展開の中で、考える必要がある。

・委員：吉備国際大学ができた当時は、大学生が外から来て、市内で育てて、地元に戻っていくという流れであった。まずは、若い人たちにできる限り、定住してもらいということでの取組だったと思う。大学で学んだことを地元に戻元してもらい、農業にも携わってもらいたいとの思いがあった。

・委員：卒業後の新規就農はハードルが高い。若い人がリスクを負いすぎる。農業研修生のシステムについて、親方のところに、市が中継ぎをして研修に入ってもらい仕組みなのか。

⇒事務局：研修生を受け入れた農家に支援を行う仕組みになっている。研修に入った人には間接的に賃金補助がある。

・委員：補助の財源は市となっているのか。

⇒事務局：農林水産省の農の雇用事業による補助となっている。

・委員：この事業は平成30年度で終わりか。

⇒事務局：補助事業としては終わりだが、平成31年度も市単独事業で継続している。

・委員：Iターンや吉備国際大学の学生・卒業生など、まずは受け入れるための受け皿を農業に関わらず作っていかなければならない。もう少し支援をしてもいいのでは。農業の場合、新規就農に入るだけでも制度が複雑な印象がある。それと分けて考えていっても需要があるのでは。

・委員：農業研修生とはどのような方が多いのか。

⇒事務局：ある層に特化している傾向はない。移住相談で農業をしたいという相談は受けることはある。

・委員：就農者は45歳未満の方が多いのか。

⇒事務局：45歳の新規就農者の割合が多いということで、就農者の割合が多いというわけではない。

・委員：達成状況Bは実績が減ったということをつけているのか。取り組みの加速化とは何を加速化するのか。どれも取り組んでいないわけではない。親方制度など年

齢など構造的な問題もある。加速化してできるものなのかというところ。

⇒事務局：量的にも質的にもという意味で加速化という表現としている。農林振興課へも就農の問い合わせはあり、移住の面ではふるさと創生課にも問い合わせが入る。会社をリタイアして、田舎暮らしや農業をしたいというニーズもあるが、我々としては、45歳以下の就農者に着目して取り組んでいけたらと考えている。

- ・委員：県で就農支援セミナーがある。そこに市役所や個人の会社が入っていて、そこで淡路に行こうかということにもなる。若い方がいると聞く。
- ・委員：定年退職された方が淡路に来て就農することは多いのか。  
⇒事務局：そういう方もいらっしゃる。
- ・委員：若手の方の中で子どもを自然の中で育てたいというのが、増えてきている。うまく取り込めるようなシステムを作る必要がある。  
⇒事務局：K P I の設定は若い方を取り込む意味で45歳にしている。
- ・委員：田舎暮らしをしたい人は、子どもを自然の中で育てたいという人と、子どもが手を離れたから田舎暮らしをしたい方に、年齢層が分かれる。両方を取り込めるシステムがある方がいいと考える。
- ・委員：地域で使っていない施設等の利活用を促進する仕組みとはどのようなことを行っているのか。  
⇒事務局：新規就農する際の初期費用を抑えるため、倉庫やトラクターなどの再活用の仕組みを考えているが、取組は進んでいない。
- ・委員：進めるには、こちら側も関与しないといけない。
- ・委員：地区ごとに貸したかったり、貸したくなかったり、色々な事情があるのではと考えるが、使っていないものがあれば、使えた方がいいと考える。もう少し、新規就農を推進できるように具体的な対策を考えてほしい。
- ・委員：以前、知り合いの高齢農家が亡くなり、後継ぎがいないため、機械を譲ってくれるという話があった。機械は一式揃っているから、受け取れないと断ったが、倉庫も軽トラも全部揃っているのであれば、そこに新規就農の希望の人が入ればと思った。私たちには繋がりもないし、地元の農家しか知らない。新規就農者の知り合いがいたら繋げることができたが、結局、淡路に家がいないから、倉庫は解体し、機械は機械屋に引き取ってもらうことになった。もし、そこに繋ぐことのできる窓口があればと思った。農家をしていると、たまにそういう話が回ってくることもあるので、もったいなかったなと感じている。
- ・委員：知り合いで、親の畑が家にあるから、定年退職後に農業をやりたいと聞いてい

たが、軽トラがない、トラクターがないとなり、結局できなかったという話も聞く。マッチングは必要だと考える。定年退職後に、退職金で農機具を全部揃えるのは、現実難しい。

⇒事務局：空き家バンクに登録している物件で、農機具付のものがたまに出てくる。

需要があるから、すぐに買い手が見つかる場合もある。

- ・委員：土地の所有権と使用权に課題もある。最近の農業は高度化している。機械も古いものは眠っているので、活用するシステムが必要。
- ・委員：後継者問題はどうか。後継者がいなくて、田が最近の農業は高度化している。機械も古いものは眠っているので、活用するシステムが必要。
- ・委員：市の方で遊休地の把握はしているのか。

⇒事務局：把握はしている。利用増進ということで、農業委員会で使用しない農地の貸付等の斡旋はしている。

- ・委員：窓口はあるので、もう少し活用できるよう、見えるように、整理をしている必要があるのではないか。
- ・委員：新規就農者や農業委員は最終手段であって、結局は親戚や隣人になる。新規就農者に回るのは、道がなかったり、排水がなかったり、水が入ってこなかったり、誰も使わないから使わせてもらえるという土地ばかり。最近は、水はけが良かったり、水が取りやすかったり、少しでも条件の良いところは、大きい農家や青果屋に変わってきている状況。実際のところは難しい。
- ・委員：各地域で仲介する人が出てきたら、信頼のできる仲介のスキームはできると思う。
- ・委員：その役割が農業委員で、各地区には既に何人かいる。繋いでくれたらいいと思うが、外から来た者に対しては、繋いでくれない実態がある。就農者がやっと使えるようになった田んぼが、全然使えない田んぼであったということも何軒も見ている。
- ・委員：新規就農しようとしている理想と現実にギャップがある。
- ・委員：親方農家をやっているが、新人を育てている余裕はなく、自分たちの生活に必死なところもある。

⇒事務局：理想と現実のギャップを埋めるためにも、指摘のあった農地の遊休地の見える化や機械等を活用できるためのシステム化をやっていく必要がある。

#### 松帆銅鑼を活用した郷土愛の醸成と地域経済の活性化

- ・委員：令和2年4月に調査が完了し、松帆銅鑼が返ってくるのか。その時、何かイベ

ントか何かをする予定なのか。K P I の玉青館入館者数が大きく実績と離れている。

⇒事務局：何らかのイベントは行うものと考えている。入館者数は、当初の目標が高かったとの認識をしているところ。

・委員：観光客の増加を見込んでいたのか。

⇒事務局：地元の方と観光客を見込んだ計画としている。銅鐸が返ってくるのが、来年度ということで、今年度に展示ケースや施設の改修を行った上で、松帆銅鐸を迎える準備をしていく考え。交付金は平成30年度で終了しているが、平成31年度以降も、松帆銅鐸を生かした文化財観光として、3か年の交付金の採択を受けている。

・委員：これから旅行者数を増やしていくために、具体的にどういった取り組みをするのか。

⇒事務局：銅鐸自体の集客力がかなりあると考えている。過去に松帆銅鐸の一時帰国イベントを行った際もかなりの集客があった。松帆銅鐸を見たいというニーズがあると聞いている。

・委員：関連グッズを開発しているとあったが、玉青館でしか買えないものなのか。

⇒事務局：陸の港西淡に常設ブースを構えている。また、うずの丘や大鳴門橋記念館にも常設ブースを置く方向で進めている。

・委員：南あわじ市に来てもらう観光客の増加にも繋げていかないといけないので、他の地域との関わりとか、一緒にやっていく事業はどうなっているのか。

⇒事務局：日本遺産で31の文化財が登録されており、松帆銅鐸もその中の一つに位置付けられている。それらの遺産との連携として、今年度は文化財観光として、観光地の洗い出しをして、モデルコースを作ろうとしている。モデルコースの要素となる文化財の抽出を、委託業務でしているところ。今年度末には文化財観光コースのモデルができる見込み。

・委員：モデルコースができれば、来場者数も増えるのではないか。

⇒事務局：増える。また、観光客には市内を周遊してもらうことも考えている。

・委員：実際に周遊している観光客はどの程度いるのか。

⇒事務局：1年間の観光入込客数は300万人程度となっている。

・委員：銅鐸のVRを3人並べて観てもらうのは面白い。ただ、映像が一種類、1度体験して終わりなのは残念。そこで造っているというようなストーリー性がほしかったところ。歴史的な価値としては評価できるが、映像にインパクトが足りない。

・委員：K P Iにある集客数や売上数はイベントによるものとなっている。将来的に継

続していけるのかが心配なところ。観光面での定番化してもらう必要がある。玉青館の改修にも、保管できる水準にするのに、多額の費用がかかると聞いている。

- ・委員：島内一つにして、歴史的なものを全て周るような観光ルートがあれば、観光で周ってくれるようになる。
- ・委員：ゲームアプリで、日本遺産を周るものがある。
- ・委員：今後、設定するモデルコースは南あわじ市だけのものか。また、モデルコースに使う歴史要素の選定はどんなものがあるのか。  
⇒事務局：今、作ろうとしているのは南あわじ市だけのもの。日本遺産の中でも、モデルコースの設定はされている。歴史要素の選定は、松帆銅鐸のほかに、古津路銅剣などがある。日本遺産ではゲームアプリを使って、周ってもらっている。アプリにクーポンもついており、施設割引などがある。
- ・委員：地元だが、小学生があまり銅鐸に興味を持たない。もったいない。子どもを連れて行くが、銅鐸しかないと1度は行っても2回目がない。銅鐸が何かに使われていたとか、何らかの魅力がほしい。

#### 南あわじドローン（UAS）産業育成事業

- ・委員：ドローン活用によるトラブル、航空事故等はないのか。  
⇒事務局：本市では特に聞いていない。
- ・委員：ドローン活用セミナーはどの程度の人に参加しているのか。  
⇒事務局：市内企業21社で44人が参加している。
- ・委員：ドローンを活用しての作付け状況の把握はもう行っているのか。  
⇒事務局：市内農用地2,840haについては、農用地の現況確認を前年画像と経年比較はすることができる。
- ・委員：市が確認できるデータで、住民は見ることはできないのか。  
⇒事務局：公開はしていない。
- ・委員：ドローンの操縦は現地でやっているのか。  
⇒事務局：過年度に飛行コースの構築をしているので、地区ごとに自動設定を行うことにより撮影している。
- ・委員：害虫被害などの確認は行っているのか。  
⇒事務局：実証実験でやっており、活用したい思いはあるが、うまくいっていない部分もある。例えば、有害鳥獣にも活用したいところだが、活動時間が夜間であり、夜間の飛行ができない。また、飛ばそうとしても、固体の把握までには至らないという状況となっている。

- ・委員：玉ねぎのべと病であれば、空撮ですぐに分かるかと思う。  
⇒事務局：撮影画像を見たところ、べと病を確認できる写真もあった。ただし、システム上での画像分析までは、現時点では行っていない。
- ・委員：今の時点では、空撮して得た写真を見て、状況を把握する内容となっている。今後、農薬散布なども出てくるのではないか。将来性のある分野だと考えているので、継続していけばいいと思う。

### 南あわじ版「人生二毛作社会」推進プロジェクト

- ・委員：この事業の目的は、人手不足の解消か社会貢献活動のどちらなのか。  
⇒事務局：目的は二つある。まず、人手不足の解消、定年退職した人や余裕がある人とマッチングする。また、健康寿命を延ばすことがあり、何もしていないよりは、社会と繋がりができる方が健康な時期を長く保つことができる。
- ・委員：上手く絡み合っていない気がする。軽作業だけでまず進めていくと、最初はマニュアル作りなど施設の受け入れ負担がかかる。高齢者等の活動により職員の負担軽減に繋がる効果はすぐに出てこないと思うが、社会貢献がしたくて来ている人たちなので、もう少し分けて考えていった方がいい。例えば、軽作業を手伝ってほしいということであれば、マニュアル作りを助けることは、市からの支援が必要。社会貢献したい人に対しては、軽作業と分けて、社会貢献した人用のポイント制度を作っていってもらえたらと思う。  
⇒事務局：今あるボランティアと仕事の間を狙いとしている。社会と繋がりがなくなった人たちに、どうすれば出てきてもらえるかというところがあり、ポイントを発行している。今、ボランティアでやっている人の活躍の場を広げるだけであれば、目的が達成できない。
- ・委員：同じ内容でやるから、ボランティアをするという人もいるのか。  
⇒事務局：ボランティアのつもりが、活躍の場が広がったという人もいる。事例としては少ないが、狙い通り、退職後に毎日施設に行き作業して、ポイントで買い物するという人もいる。雇用未満ということで、雇用契約すると体力的にも厳しいという人の受け皿にもなる。
- ・委員：軽作業を行う人たちには、ポイントの加算をしていたのか。  
⇒事務局：4月からは加算している。200ポイントを基本で、1時間ごとに加算している。作業の中でも、傾聴などのボランティア的なものと、草刈りなど労働として成り立つものを仕分けして、重めの作業については、400ポイントを増やしている。

- ・委員：人手不足解消に関して、65歳で仕事をやめると、その後の時間は長い。その人  
たちを上手く取り込んで、人手不足解消に取り組んでいきたいところ。興味のある  
分野に来てもらうことが大事。自治会の中で話を聞いていると、シルバー人材  
センターに行っているけど、辞めてしまう人もいます。お金をもらってやっていると、  
頼りにされる。頼りにされると嬉しいから頑張る。そうすると、徐々に労働時間  
が長くなっていく。断れない関係が嫌になってしまい、辞めてしまうという話も  
聞く。そういう人たちは、ポイント制度にはまず来ない。また、純粋にボランテ  
ィアをしたいという人で、ポイントを与えると、逆にやる気がなくなってくる人  
もいます。お金や物を与えられると、かえって意欲が下がってくる効果もある。好  
きな時に行って、好きなことをやるとなると、ちょっとしたことしかできない。  
高齢者の再雇用以外に来てもらうのは、専門職ではない。介護施設などでは、専  
門職を助けることを担ってもらいたい。介護の部門では、上手くいっていると感じ  
ている。65歳になってから、参加してもらうのは難しい。もう少し前から取り  
込める仕掛けが必要。家にはじっとすることができないが、することがない人も  
多い。特に男性は、誰かと話したいが、グループの中には入らない人が多い。  
現役でやっているときなど、早い段階から、地域で勧誘するような仕掛けがある  
のではないかと思う。

⇒事務局：地域でお手伝いというのは今やっていない。今後の方向性で企業の中  
に入っていき働く方法を書いているが、地域でお手伝いというのは、どういう  
風に入りやすくするかが課題。一度繋がりが途切れてしまうと、入りづら  
いと思う。

- ・委員：定年が徐々に上がってきている。ボランティアで働く期間も短くなってきてい  
る。有効求人倍率が高い仕事は、しっかり働いてほしい分野でもある。仕組みは  
必要かと思うが、このマッチングに疑問もある。分けて考えた方がいいのではな  
いか。

⇒事務局：色々なニーズがある。10月からは試行実施第2期を迎える。指摘のと  
おり、有効求人倍率が高い分野である。所得を求めている高齢者もいる。一  
方で、シルバーや企業にヒアリングしていると、最初のシルバーのアンケ  
ートで弾かれて、登録したまま募集が来ないといったケースもある。企業  
に聞くと、この人働けそうなのにと話もあつた。丁寧にマッチングす  
れば、高齢者雇用は生まれるとの問題意識で、第2期は企業の働き方応援  
プロジェクトとして取り組む予定。色々な人がいるというのが根本にある  
ので、関わり方も考えていきたい。

- ・委員：K P I ②で施設の数が出ているが、3年目で18箇所まで増えるものなのか。  
⇒事務局：負担軽減に繋がった施設となっている。実際に14施設で活動しているので、1年目から軽減されるものではない。ある程度、継続的な関係がある  
とより負担軽減に繋がりやすいのがあり、徐々に増えていくのではないかと  
考える。現状でも、傾聴をしていただくことで、他の仕事ができるとの  
声はもらっている。
- ・委員：K P I ④シニア層の人口流入増加数について、事業推進により、移住者が増え  
るとのことか。  
⇒事務局：総合戦略の目標で人口を増やすという内容がある。また、本事業は生涯  
活躍のまちづくり分野で交付金を申請しており、目標として、高齢者の増  
加を設定している。今、20代・30代の若手は流出しているが、高齢者は流  
入してきている状況。
- ・委員：シニア層は自分の親の面倒を見るので、忙しいと思うので、雇用に繋げていく  
のであれば、若い方がいいのではと考える。  
⇒事務局：高齢者という切り口よりも、引きこもりという切り口の方が重要かもし  
れない。定量的に把握はできていないが、関係課に聞く限りでは、市内に  
も引きこもりがちな人はかなりいる。
- ・委員：親を看ている独身男性は多いと聞く。
- ・委員：ポイントの有効期限は。  
⇒事務局：ポイントを商品券にしてから1年間。1,000円で1枚となっている。
- ・委員：敬老祝金とは違うものとなっている。全て同じポイントにすれば、利用率が上  
がるのではないかと。ポイントを知らない人も多い。一つにまとめる方がいい。

#### 陸の港西淡を拠点とした観光振興・地域活性化事業

- ・委員：利用者数が増加しているが、陸の港西淡から乗る人数が増えたということか。  
⇒事務局：フットバスが停車することになったことで増えている。フットバスが全  
てではないが、陸の港西淡の利用者数自体が増えている。
- ・委員：売店の売上高も増えている。  
⇒事務局：オープン当初は、品物が少なく伸び悩んだが、月平均80万円から90万円  
程度で、夏休みシーズンで100万円程度の売上があった。この売上を使って、  
委託先の近畿日本ツーリストの方で、バスを借りて観光ツアーをやってい  
くことを考えている。
- ・委員：陸の港西淡の利用者数の増加は、駐車場も関係している。福良の人でも、陸の

港西淡まで乗りに来る人がいる。駐車場が広い点が利用に繋がっている。

- ・委員：バスの利便性の向上や便数が増えたことが要因となっている。
- ・委員：待合室が広くなり、電光掲示板が設定されて、分かりやすくなった。
- ・委員：これからコミュニティバスの便数や台数は増えないと思うが、フットバスのような高速バスの発着便数が増えれば、もっと利用者数は増えてくる。学生が四国から来ており、乗れるバスがなかったことから、このバスができて助かっている。
- ・委員：フットバスは大阪まで出ている。電車の乗り換えがなく、電車より値段も安い。  
⇒事務局：高速バスは乗れても降りることができない。南あわじ市にとっては、どっちでもできたら、より陸の港西淡が拠点となれるのではないか。
- ・委員：川側の駐車場は整備されるのか。  
⇒事務局：今、工事に入っているところ。
- ・委員：夜間利用するには、女性一人では怖い。らん・らんバスの方に行くには、利便性が悪い。  
⇒事務局：トンネルと階段部分のバリアフリー化の話は本四高速にしているところだが、対策がいつになるかは決まっていない。駐車場の工事は今行っているところ。  
⇒事務局：この事業は、淡路島全体の公共交通の見直しを別途行っている中で、陸の港西淡を公共交通の拠点として位置づけることで、施設改修を国の交付金で行っている。また、ASAサイクリングツーリズムのレンタサイクル事業を陸の港西淡で行うということで、観光客の窓口として、それから、公共交通の拠点として位置づけた上で行っている。今後も公共交通の活性化や見直しは随時行っていくが、陸の港西淡を拠点として諸々の施策が考えられることとなる。より一層利用者の利便性や満足度が求められていくと考えている。
- ・委員：観光バスが陸の港西淡に停まっているが、料金は取っていないのか。  
⇒事務局：申請があれば、利用料を取っている。慢性的に待ち合わせ場所になっている場合は、注意をしている状況。駐車場そのものが不足しているので、市としては、ストップをかけている。

#### ゆめるんセンターを拠点とした世代間交流・地域活性化事業

- ・委員：利用数の減少に保育料の無償化の影響があるとのことであるが、小さい子どもの人数はあまり変わらないということか。  
⇒事務局：出生数の減少もあり、子どもの人数も減少傾向にある。

- ・ 委員：クッキングルームでのイベントで栄養士は来ているのか。  
⇒事務局：来ていない。
- ・ 委員：イベントをするということは、人を呼び込んで、コミュニケーションを取る場にしようとしていると思うが、南あわじ市が子育てに力を入れていることをアピールするために、食事の栄養面の指導をしているとか、もう少し進めることを考えていく方が市にとってよいのではないか。せっかく場所ができたので、それを活用する方法を考えていけばいいと思う。  
⇒事務局：ゆめるんセンターでは、子育て世代を一人にしない、孤独にしてはいけないということで、保護者の方々や就学前の母親の繋がりを作る場としての役割がある。相談に乗れるようなコンシェルジュを配置しており、気軽に相談を受け付けできるような体制を整えている。あとは、クッキングイベントなど、特色を持ったものができたらいいと考えている。
- ・ 委員：父親の参加はあるのか。  
⇒事務局：父親による育児参加のイベントも実施している。とびだし坊やの製作や運動会などを行っている。男女共同参画という面では、男性の参加率は伸びないが、イベント等で啓発しているところ。
- ・ 委員：イベントは土日が多いのか。  
⇒事務局：土日にも開催しているが、平日も行っている。
- ・ 委員：K P I に市外出身登録者の増加としているのは。  
⇒事務局：人口増加の目的という事業側面も持っているため、K P I に設定している状況。
- ・ 委員：元々二宮保育所は駐車場がなかったのか、整備されたということか。利用人数を見ると、かなり増えている。  
⇒事務局：約20台整備している。
- ・ 委員：登録者の状況は。  
⇒事務局：保育所に入る前の子どもを持つ方が主となっている。働く女性が増えてきているので、在宅で子育てをする人は少なくなっている。センターを利用するよりは、保育所に預けられる人が多くなっている。

#### その他

- 事務局より、次期総合戦略の策定の予定について説明を行った。

#### 4. 閉 会

- 閉会にあたり、淀副会長よりごあいさつをいただいた。